

続 変化する国語辞典とその活用

Changing Japanese dictionaries and how to use them part 2

国語科 戸谷 順子

要 旨

本稿は中学校国語科における国語辞典の活用を試みた単元「舟を編もう～語釈を考える～」の実践を通して、国語学習に欠くことのできない国語辞典に見られる最近の変化について考察するものである。

拙稿「変化する国語辞典とその活用」(註1)では中学2年生を対象に、用例採集・語釈作りの実践を紹介した。そこでは国語辞典に新語を載せる傾向にあることを生徒たちに紹介し、身近に見られる新語(まだ辞書に載っていないことば)の用例を生徒たちが集め、編集会議を行い、採録することば・しないことばを選定していく授業実践をまとめた。本稿は中学1年生を対象に、プレーストリーミングやKJ法を用い、話し合い活動を取り入れながら語釈に挑戦し、国語辞典の出版社が行う企画を知ることで、国語辞典のあり方を考察した授業実践をまとめたものである。

キーワード：国語辞典 語釈 プレーストリーミング KJ法 デジタル版(アプリ版) 辞書

I はじめに

辞書は専門性が高く、説明もどこか堅苦しい、そういうイメージが付きまとうものである。ところが最近の国語辞典は、とても平易なことばで、分かりやすく説明したものが増えてきている印象がある。『三省堂国語辞典』(通称『三国(さんこく)』、本稿では以下『三国』と記す。最新版は第7版。)がその代表的存在であるが、辞書は「改訂したら終わり」ではなく、すぐに次の改訂に向けての用例集めが始まる。そのプロセスを編集委員の一人、飯間浩明氏は書籍出版やイベント、SNSへの投稿などを行い、ことばや辞書作りへの話題を提供し続けている。(註2)

また、小学館『デジタル大辞泉』(中型国語辞典『大辞泉』のデジタル版)のように毎日のようにことばが増補(更新)される辞書も出てきた。図1の左枠内を見ると、「大辞泉編集システムに追加した言葉の数」とあり、このサイトを閲覧した2015年10月11日は「最新採録語数284,788語」であり、「前日比+19」「1ヶ月前比+219」となっている(枠は筆者がつけたものである)

The image shows a screenshot of the digital dictionary website. The main content area features a search result for the word '馬鹿' (baka), with the text 'あなたにとって、「馬鹿」とは？ あなたの言葉を辞書に載せよう。2015'. Below this, there is a statistics box with the following information: '最新採録語数 284,788語', '前日比 +19', and '1ヶ月前比 +219'. To the right, there is a list of updates with dates and descriptions, such as '2015.10.1 【大辞泉】「クイズサイト」に収録の漢語辞「ガクニツク」を追加しました。' and '2015.9.28 新収録【大辞泉】新収録語699語、503,500にアップグレードされました。'.

(図1：『デジタル大辞泉』HPより)

る)。これはデジタル版ならではの更新速度であろう。

このように、国語辞典改訂のあり方は日々変化しているので、授業の中で国語辞典を使っていくだけではなく、国語辞典の変化について生徒と共に考えていく授業を作ろうと考えた。

II 国語辞典の変化

今回、二つの国語辞典に着目し、授業展開を試みた。一つは『三国』、もう一つは『大辞泉』である。これら二つの国語辞典は昨年、ことばに関する企画を行っていたところが共通している。

三省堂の企画は、「三省堂 辞書を編む人が選ぶ 今年の新語2015」(以下、本稿では「今年の新語」と記す。)というもので、応募概要(三省堂HPより抜粋)は以下の通りである。

<p>概要：三省堂が2015年を代表する新語を募集します。応募いただいた新語などから選考委員が厳正に選考の上、「今年の新語」ベスト10を選出し、「国語辞典風味」の語釈をつけて発表します。</p> <p>募集期間：2015年9月1日(火)～11月30日(月)</p> <p>応募方法：Web 応募フォームもしくはTwitterにて投稿いただけます。</p> <p>選考方法：当社辞書編集員(新明解国語辞典、三省堂国語辞典、三省堂現代新国語辞典)他で構成される「今年の新語2015選考委員会」が厳正に選考します。(以下略)</p>

実際に辞書作りに関わっている編集委員が語釈をしてくれるところ、概要にある「国語辞典風味」の語釈をつけてくれるというところに、この企画の面白さがある。

また、『大辞泉』は二つの企画を行っていた。一つは「求ム、新しい言葉。」(図2) もう一つは「あなたの言葉を辞書に載せよう。2015」(図3)である。

「求ム、新しい言葉。」はまだ辞書に掲載されていないことばや、既にそのことばは存在するものの、新しい意味や解釈が生まれ始めたことばを投稿する企画で、応募締切はなく、随時受け付けている。

募集することばの例(既に『大辞泉』に採録されたことば)のうち、「構ってちゃん(俗に、他人にほめられたい、親切にされたいなども気持ちが強く、周囲の人の気を引くような言動を繰り返す人)」や「持ってる(特別な何かをもっている。ふつう、強運をもっていることにいう。)」などを示しながら、「編集部がしっかりと追跡調査・取材をし、これぞ!という言葉は、『大辞泉』に掲載して」いくことを企画の趣旨として示している。つまり、我々一般人にとって、自分が投稿したことばが辞書に載る可能性を大いに持っている魅力的な企画、ということになる。

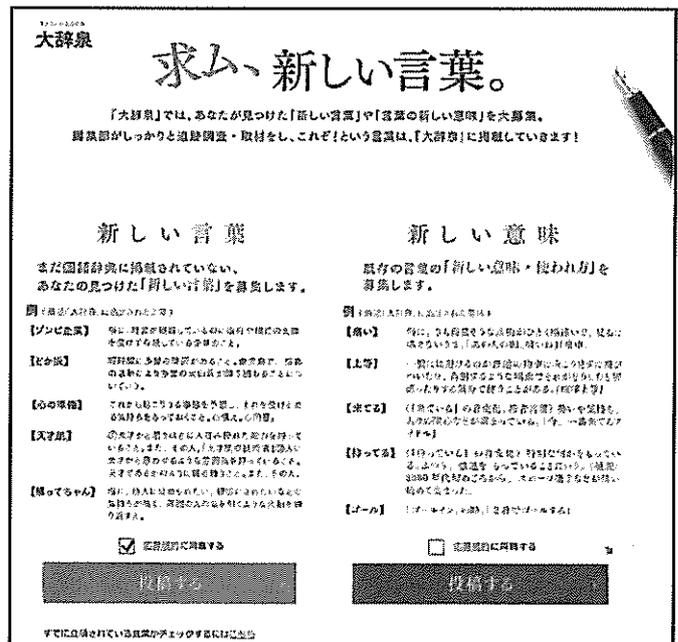
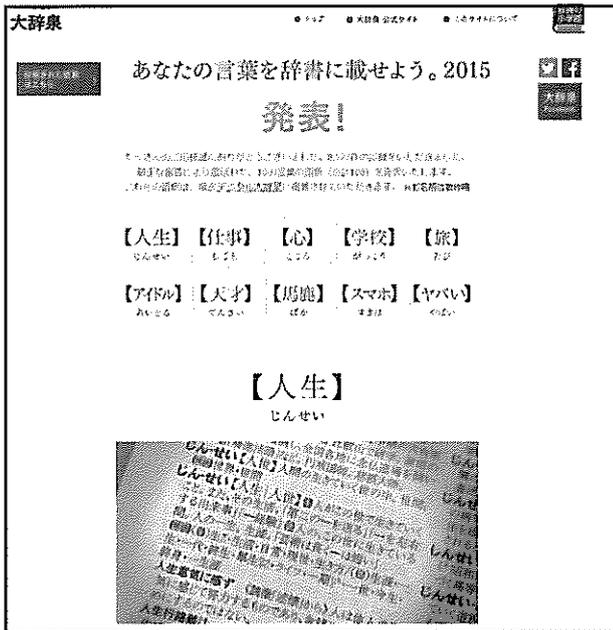


図2:「求ム、新しい言葉。」「大辞泉」HPより)



「あなたの言葉を辞書に載せよう。2015」は、指定された10のことば（【人生】【仕事】【心】【学校】【旅】【アイドル】【天才】【馬鹿】【スマホ】【ヤバイ】）の語釈を考え、HP上から投稿する企画である。この企画は2013年・2014年にも行われており、今回は3回目となる。HP上からニックネームを用いて投稿するしくみであるため、誰でも気軽に応募できる企画である。気軽に応募できるため、語釈とは言い難いちょっとしたつぶやきなども多く投稿されているが、生徒たちからは「面白い」「分かる気がする」という反応が多かった。（例えば「人生」は「一度はあきるもの。」「振り返れば楽しいもの」という書き込みが見られた。）

（図3：「あなたの言葉を辞書に載せよう。2015」『大辞泉』HPより）

三省堂と『大辞泉』が行った企画の共通点は、（ささやかながらも）辞書作り・語釈作りに一般人が参加できるところにある。そして、それらの投稿がSNSなどを利用して、いつでも、誰でもできる気軽さにある。更に、投稿したことばや語釈が、今後の改訂作業の中で採用される可能性を大に持っているところにある。これが、今までの国語辞典の世界ではあまり見られなかった、大きな変化であろう。

Ⅲ 授業実践

Ⅱで述べた、三省堂と『大辞泉』が行った企画と現在本校で取り組んでいるCD科（コミュニケーション・デザイン科）を踏まえ、生徒たちが語釈作りを行いながら今後の国語辞典のあり方について考える単元、【舟を編もう ～「語釈」を考える～】を昨年10月に行った。特に、3～4人で構成される学習班での話し合い活動に重点を置き、対話を通して協働的に語釈を考える場面を設定した。以下、授業の実践である。

1 単元のねらい

- ・身近なことばについて、お互いの考えや体験を伝え合って整理する。 (A(1)ア)
- ・話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめる。 (A(1)オ)
- ・身の周りのことばについて興味や理解を深め、語感を磨く。 (言語活動)

ここでは話し合いの基本を学びながら、自分の意見を主張するだけでなく、相手の意見に耳を傾け、それを踏まえて話し合いや対話を深めることを目指した。話し合いを深めるための意識・姿勢として、【相手に体を向ける】【共感する】【相づちを打つ】【感想を述べる】【質問する】【話を振る】を〈話

し合いの極意)とし、これらを意識させながら進行役などの役割を決め、話し合いを行った。また、発展的な学習として、従来の辞書作りや語釈作成の様子を飯間氏の著作や『舟を編む』(三浦しをん作)から学ばせた。さらに、国語辞典の編集(改訂)のあり方を知り、なぜ従来の編集(改訂)方法から変化してきているのかを考えさせた。

2 授業づくりの工夫

各教科やCD科の授業を通して、協働的な話し合いを学んでいる段階の1年生であるので、自分の考えを述べることには意欲的である一方、話しながら話題が逸れ、雑談のようになってしまうことも多い(生徒たち自身もそのように感じている)。本単元ではことばの定義に挑戦しながら、よりよい話し合い、深まる話し合いを目指した。

そこで、最初から国語辞典の語釈のようなかっちりとした定義を目指すとは難しく感じる生徒もいるため、身近なことばにまつわるイメージや体験をまずは挙げ、それをもとに学習班で話し合い、そのことばの定義を行う体験をさせた。さらに現在の国語辞典で見られる「参加型」辞書作りについて、なぜそのようなことが起こっているのかを考えさせた。本単元を通して、生徒がことばや国語辞典により興味を持ち、語感を磨き、ことばを駆使できるようになることをねらいとした。

《コミュニケーション・デザイン科との関連》

身近なことばの意味を説明するにあたり、学習班での話し合いを行い、協働的な学習とした。個々のイメージや意見を整理・分類する際、ブレインストーミングやKJ法を用いた。互いの考えを可視化し、共有・検討しながら、より考えを深める場とした。また、話し合い後のふり返りを行い、協働的な話し合いにどう参加していけばいいかを考える場を作った。

3 題材・単元の展開

- 第1時 〈話し合いの極意〉とは
- 第2時 身近なことばの定義をしよう(学習班での活動)
- 第3時 話し合いの成果を発表しよう(語釈を評価し合う)
- 第4時 話し合いのふり返り・辞書作りとは
- 第5時 今どきの国語辞典
- 第6時 国語辞典の変化を考える

【第1時 〈話し合いの極意〉を知る】

東京書籍「新しい国語1」の話す・聞く単元「話し合いで理解を深めよう」(P193～P198)を活用し、〈話し合いの極意〉を確認した。〈話し合いの極意〉を【相手に体を向ける】【共感する】【相づちを打つ】【感想を述べる】【質問する】【話を(他の人に)振る】の6つとし、その6つをプレートにして黒板に掲げた。話し合いの際には、相手の発言を最後まで聞き、話の方向を捉えて自分の考えを相手に分かるように伝えることを生徒に意識をさせた。隣の席の生徒と「今日の昼休みの過ごし方」や「最近気になること」などを話題として、〈話し合いの極意〉を意識させながら伝え合う練習を、毎回の授業の冒頭で行った。

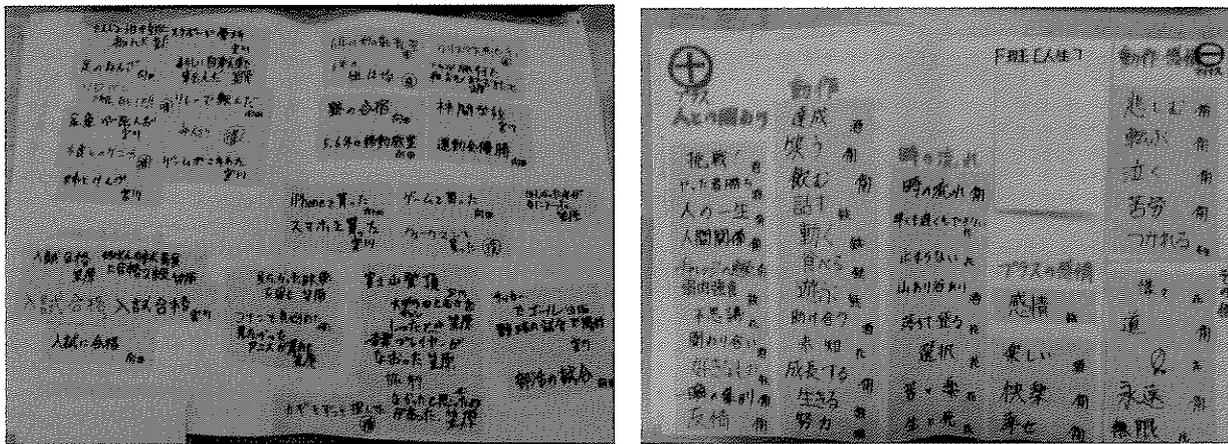
【第2時 身近なことばの定義をする】

次に、学習班での話し合いを行った。話し合いは、下に挙げた身近なことばの中から班で一つ選び、その意味を定義するというものである。

身近なことば：友だち・教室・天才・ルール・部活・テスト・大人
人生・先輩・ゲーム・卒業・家族・思い出・学校

ここでは、辞書的なことばの定義を目指すのではなく、「自分の体験をもとに」「どんなときに感じるか」「自分にとってどのような存在か」などを自由に挙げていった。その際、生徒には付箋を渡し、ブレーストーミングを行い、思いついたものをどんどん書き出していった。その後、生徒にKJ法の説明をし、自分たちで項目を考えながら付箋をグルーピングして貼っていった。(図4)

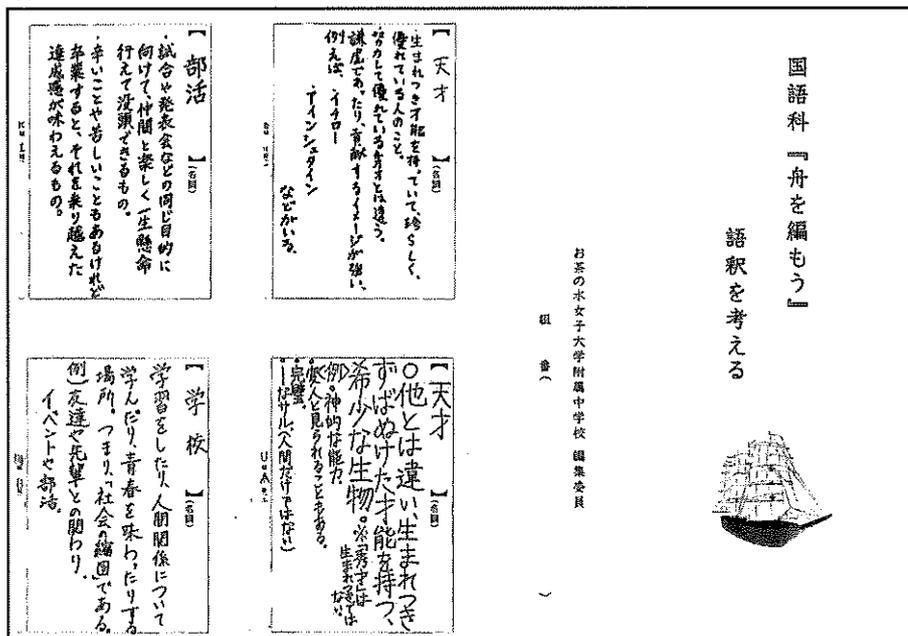
グルーピングをもとに、そのことばの定義を話し合った。定義は最初から国語辞典のようにしようとせず、聞き手にとって「あ～、分かる!」「そういうときってあるよね!」と思ってもらえる定義にするよう指示をした。



(図4：KJ法を用いて生徒がグルーピングしたもの)

【第3時 語釈を発表し、評価し合う】

書画カメラを用い、自分たちの考えた定義をスクリーンに示しながら班ごとに発表をしていった。聞き手となる生徒には、発表を聞いて評価用紙を記入させ、最後に「私が選ぶ、BEST of 定義」を選ぶよう指示した。自分たちで作ったことばの定義は清書させ、4クラス全てを図5のようなプリントにしてまとめ、第6時に配布した。



(図5：生徒が作成した、ことばの定義をまとめたプリント)

(図6：生徒が記入した評価用紙)

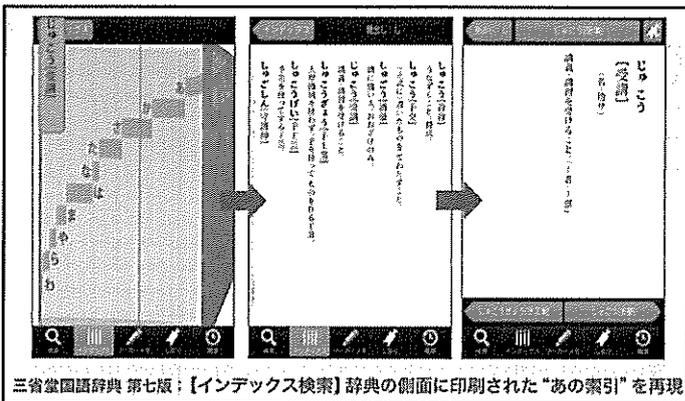
【第4時 話し合いのふり返り・辞書作りを知る】

前時のふり返りとして、学習班になり、クラス全員の評価用紙(図6)を回覧して読む時間を取った。自分たちのことばの定義は聞き手に伝わったか、理解・共感をしてもらえたかを評価用紙を見ながら話し合った。また、「BEST of 定義」に選ばれた班の良かった点も話し合った。

授業の後半はDVD『舟を編む』(三浦しをん原作 石井裕也監督 2013年)の一部を生徒に見せ、編集会議の様子や地道に用例を集め、一つ一つの語釈を丹念に行っていく様子、その辞書が完成する前に関わった人間が亡くなってしまうこともあることを知ってもらった。辞書作りとは本来、膨大な時間や手間をかけて作っていくものであるということを生徒たちに感じてもらった。

【第5時 今どきの国語辞典を知る】

ここで、本稿第Ⅱ章で述べた三省堂と『大辞泉』が行った企画を生徒に紹介した。また、『三国』のアプリ版と『デジタル大辞泉』をプロジェクターで映し、それぞれのアプリ版を試して見せ、それぞれの辞書の特徴を考えていった。アプリ版『三国』の最大の特徴は、紙の辞書を引いているかのようなインデックス機能(図7)があることである。また、『デジタル大辞泉』は様々な項目に関連する画像や動画を多数収録しており、まさに観て楽しむ辞書となっている。(辞書というより、百科事典の要素が強い。)



(図7：『三国』のインデックス機能。BIGLOBEのHPより)

生徒たちに聞いたところ、このような国語辞典を普段利用してはいなかった。インターネット上の無料辞典は利用するものの、アプリケーションを購入するのは中学生ではまだ一般的ではない様子であった。(参考までに、アプリ版『三国』は1,700円。『デジタル大辞泉』は2,000円。『三国』は紙版を持っていると優待価格で購入可能となる。)

【第6時 国語辞典の変化を考える】

第6時は平成27年度本校公開研究会で行った授業である。以下、当日の指導案と授業の様子である。

(1) 本時の目標

- ①『三省堂国語辞典』と『大辞泉』の企画について、その面白さや（自分が）関わることの意義を考える。
- ②身の回りに溢れる様々なことばや国語辞典について関心や理解を深め、語感を磨く。

(2) 学習の展開

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> ・〈話し合いの極意〉を確認する。 【対話協働】 ・本時の学習内容を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> *本単元では第2時以降、授業の冒頭で〈話し合いの極意〉を確認している。
課題追究	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習内容について隣の生徒と確認し合う。 【伝達発信】 ・『三省堂国語辞典』と『大辞泉』の企画の共通点やメリットデメリットについて話し合う。 ↓ 【思考】【対話協働】 ・各班の発表 【伝達発信】 ・これらの企画の面白さ・関わることの意義について話し合う。 ↓ 【思考】【対話協働】 ・各班の発表 【伝達発信】 	<ul style="list-style-type: none"> *『三省堂国語辞典』や『大辞泉』の企画についてお互いに伝え合っているか。 *学習班での話し合い。班の中での役割（進行・計時・発表）を確認する。 *班全員が話し合いに参加できているか、様子を見て声をかける。 *辞書に掲載されることばや語釈に一般人が関わる（投稿）できる点に気づかせ、それによってどのようなことが見えてくるか考えさせたい。
省察	<ul style="list-style-type: none"> ・ふり返しを行う。 【思考】 	<ul style="list-style-type: none"> *ことばとの向き合い方、国語辞典の活用について自分の考えを持たせたい。

(3) 本時の評価

- ①『三省堂国語辞典』と『大辞泉』の企画について、その面白さや関わることの意義を考えたことができた。
- ②身の回りに溢れる様々なことばや国語辞典について関心や理解を深め、語感を磨こうとした。



(図8：公開研究会当日の様子)

生徒はすぐに二つの辞書の企画の「一般人も辞書作りに参加できる」という共通点に気づき、これらの企画のメリットとデメリットについて考えていった。

授業の中で生徒が挙げた、これらの企画のメリットとデメリットは以下の通りである。

〈メリット〉

- ・幅広い年齢層の人たちに、普段使っていることばや意味を応募してもらう。
 - 編集委員の視点からでは見ることができないようなことばを集めることができる。
 - 年代・性別・生活の異なる人でも、親しみやすい辞書ができる。
 - 突飛なことばでも、編集委員の視点が変わってくる。
- ・日常生活に密着したことばの使い方が分かる。日常の中では「分からない」と思った用法も載るようになる。→国語辞典がもっと身近な存在になる。
- ・編集委員にとっては、より速く、効率よくことばを知り、用例採集が楽になる。
 - 用例が多く集められるので、語釈がより詳しくなる。
 - 時代の流れに沿った語釈を作ることができる。
- ・企画に参加することで、私たちも辞書作りに少しでも関わることができる。
 - 選んだことばや考えた語釈が辞書に載るかもしれないという期待が生まれる。
 - 一般人の語釈を載せると、売り上げが増えるかもしれない。(自分の語釈が載ったら買う人が増えるはずだ。)
 - 「今を生きる辞書」(筆者註：『舟を編む』の主人公馬締光也が発したことば)が本当にできるかもしれない。

〈デメリット〉

- ・SNSやHPからの応募になるので、全ての年代の人が投稿できるわけではなく、ネット用語や若者が使うことばばかりが集まるのではないか。
 - こういう企画は、インターネットを使っている人、辞書に興味を持っている人しか知ることにはできないので、テレビやラジオ、広告などで「こんな企画をやっています」ともっとアピールすべきだと思う。
- ・適切なことばや語釈が集まるとは限らない。一部の人しか使わないことばも投稿されるので、本当にそのことばが広く使われているか分かりにくい。
- ・今どきのことばが多く載ってしまうと、元々あった「正しいことば」が何であったのかが分からなくなる可能性もある。
- ・編集委員の人たちがいる必要性がなくなってしまう可能性も。『デジタル大辞泉』のように、毎日ことばが更新されると、機械的にUPしていけばいいので、語釈などを検討する必要が本当にあるのか疑問に感じる。
- ・本来、辞書というのは専門家の方々が作っている「すごいもの」というイメージがあるので、それに自分が関わることができるという喜びがある一方、一般人が作った語釈だと、どうしても信憑性が下がってしまい、気軽に応募できる分、少しやりたい放題になってしまうところもあるはずだ。

また、一般人が辞書編集に関わる意義について、生徒たちから次のような意見が出た。

- ・私たちの考えた語釈が辞書に採用されるかもしれないという期待が生まれ、ことばや辞書に興味を持ってくれる人が増える。
- ・様々なジャンルのことばを取り入れることができるから、今まで知らなかったことばを知ることができ。→ことばを好きになり、興味を持つ人が増える。
- ・自分たちが「辞書を作っている」という感覚を持つことができるので、一つ一つのことばに実感を持って理解できるような気がする。更に、ことばの意味を改めて考えることができる気がする。
- ・皆で新しい辞書を作っているような気がしてくる。また、自分以外の人の価値観に触れることができるので、辞書に対して新しいイメージを持つことができるのではないか。

この企画は楽しそう・面白そう・画期的だという意見が多かったが、その一方で「辞書は専門家が作るから信頼できる・安心して使える」という意見が多くあり、企画への自分の関わりを考えた生徒も多かった。中にはこれらの企画が「紙の辞書の売り上げにどう影響するか」を考えている生徒もいた。その生徒は、「提案」として次のようなことをノートの隅に書いていた。

- ①紙の辞書を買うと（企画に）応募できる権利（シリアル番号など）がもらえる。
- ②その番号を入力→インターネットから応募できる。
- ③採用されると、「あなたの語釈」が載った紙の辞書がプレゼントされる！

紙の辞書を使い続けることを前提に、この企画を捉えていところが素晴らしいと感じた。

5 授業参観者とのワークショップ

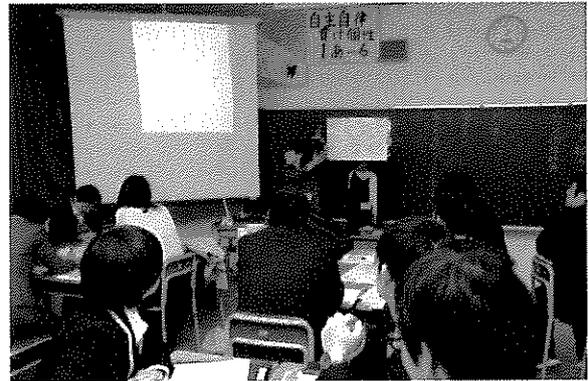
公開研究会の授業後、教科のふり返りの時間を利用して、参観いただいた方々にもブレインストーミング・KJ法を用いて語釈作りを体験していただいた。生徒と同じように3～4人の班を作り、「あなたの言葉を辞書に載せよう。2015」の10のことば（【人生】【仕事】【心】【学校】【旅】【アイドル】【天才】【馬鹿】【スマホ】【ヤバい】）からくじを引いて担当語句を決定した。以下、その語釈をいくつか挙げる。国語の先生方、また国語の教員を目指す学生さんが集まって作った語釈なので、国語辞典にそのまま採用されそうな、完成度の高いものになっている。大人ならではの視点（感慨）も込められていて面白い。

人生：自分そのもの。一度は変えてみたくなるもの。生きているときは（その）本質が分からないもの。

旅：ある目的のために、様々な移動手段を用いて日常生活や現実から離れて戻ってくることで、そこで新しい発見が得られることもある。まれに帰ってこない人もいる。

馬鹿：自分が思っていたこととは異なること。思いがけずよいことをした場合にも用いられる。また、複雑なことを単純化する際に使う。

失敗：物事の経験・体験において間違いをおかしたり、何かを失うこと。もしこういう状況になった場合、自信をなくして立ち直れないもの。ただし、人生にはこの経験はつきもので、古くから成功へのステップだといわれている。



(図9：公開研究会 教科ふり返りの様子)

6 生徒の感想

- *一般の人が辞書作りに参加するという取り組みはとても良いと思う。辞書を作る人が知らないような「現代語」も世の中にはたくさんあるので、色々な人の意見を取り入れて、より確実な語釈へと近づけることが大切だと思った。
- *辞書は紙からデジタル化へどんどん進歩しているんだな、と感じた。確かに素早く調べられたり、情報伝達が速かったりと便利だが、そのおかげで紙の辞書離れが進むといけないと思う。だから、用途に応じて辞書を使い分けることが大切だと思う。
- *辞書がどんどん進化して、便利になっていくのはとても良いことだと思う。でも、今まではじっくり時間をかけてことばを考えていたのを一日で考えるのは少し早すぎると思うし、それは信憑性に欠けるような気がした。今までの辞書作りのようにことばを「寝かせる」時間も必要な気がする。
- *ことばの定義に一般の人が関わると、色々な世代のことばが載るので、日常生活の中で使っていることばも調べやすくなる。その反面、新しいことばが載ることで、今まで載っていたことばが削られてしまうと、古いことばとして切り捨てられる感じがして、寂しいと思う。でも、ことばは使っている人によって変化していくから、参加型の企画で新しいことばを集め、載せていくのは良いと感じた。新しい言葉だけでなく、昔からあることばも何かしらの形で残していけるようになったらもっと良いと思う。

今年の新語 2015 ベスト10	
大賞 じわる	6位 着圧
2位 マイナンバー	7位 言うて
3位 L G B T	8位 爆音
4位 インバウンド	9位 刺さる
5位 ドローン	10位 斜め上
	選外 とりまエンブレム

7 企画の結果発表

三省堂「今年の新語」の結果は図10のようになった。生徒たちにこの結果を知らせたところ、大賞の「じわる」を普段使う生徒はいなかった。また、「じわる」の意味を知っているか聞いたところ、各クラス多くの生徒が「何となく分かる」と答えたものの、「普段使わない」と答えた生徒が多かった。

(図10:「今年の新語」結果発表
三省堂 HP より)

「今年の新語」結果発表のサイトには、三省堂で出版している3種類の「国語辞典風味」の語釈が掲載されていた。この3つの辞書の次の改訂で、今回10位までに入ったことばや自分が投稿したことばが掲載されるかどうかを利用する側からすると楽しみとなる。ちなみに、生徒が結果発表前に予想した大賞は、「爆買い」「それな」「自撮り(棒)」であった。

大賞の「じわる」について、この企画の選考結果のサイトでは、以下のように書かれている。

今回、堂々の大賞に選ばれたのは「じわる」でした。「面白みなどがじわじわと感じられる」という意味。「じわじわ来る」とも言います。マスコミで新語として報道されたのを見たことはありませんが、インターネットで多くの人と交流している人なら、よく知っているのではないでしょうか。

めて約半年の生徒を対象としたものである。いつも生徒には「辞書を引き続け、自分の辞書が手になじむ感覚を楽しんでほしい」と話している。生徒たちの辞書が手になじんでいく様子は、これから少しずつ見られるだろうが、今回の授業を通して、紙の辞書に対するちょっとした愛着のようなものを早くも感じ始めている生徒が多く見られ、頼もしい気持ちになった。

授業の反省点としては、三省堂、『大辞泉』それぞれの企画に実際に参加することができなかったことだ。本当なら、自分たちで選んだことばや語釈を投稿し、結果発表を皆で楽しみにする…そうできればいいと考えていたのだ。ただ、その一方で、この単元の前半は「対話・協働」を意識した授業展開にしたため、「皆で話し合ったもの」を投稿することに少なからず授業者自身が違和感を覚えていたのである。

今回、「一般人が辞書作りに参加できる企画」を取り上げたが、「語感」は人それぞれであるので、話し合った結果を投稿するのではなく、個人の感覚、直感を持って企画に参加すべきであるという考えもあった。いずれにせよ、生徒個人での応募をもっと呼びかけても良かったという反省が残る。

ことば・辞書に関わる授業を行う際、いつも感じることであるが、これからは生徒には何気なく使うことば、目にしたり耳にしたりすることばに「ちょっと立ち止まって考える」姿勢や意識を今後も持ってほしいと考えている。そして様々な作品に触れ、多くの人と関わり、たくさんのことばと出会って豊かな言語感覚を身につけて欲しいと願っている。

註1：「変化する国語辞典とその活用」(平成26年 本校紀要 第43集)を参照されたい。

註2：例として、以下に飯間浩明氏の著作を挙げる。

『辞書を編む』(光文社新書 2013年)

『辞書に載る言葉はどこから探してくるのか? ワードハンティングの現場から』(ディスカバー携書 2013年)

『三省堂国語辞典のみみつ』(三省堂 2014年)

『辞書編纂者の、日本語を使いこなす技術』(PHP 親書 2015年)。

Twitterでも、ことばについてのつぶやきが多い。辞書利用者からの質問に答えることもある。

https://twitter.com/IIMA_Hiroaki

参考文献 三浦しをん『舟を編む』(書籍：2011年 光文社 DVD：2013年 Asmik Ace)